

太原に残る明代の寺

後藤千恵

1月になり、以前に比べだんだんと暖かくなってきており、春が近づいているのが感じられます。以前は昼間でも手袋とマフラーが手放せなかったのですが、今は夜間でもそれらは必要ないほどです。

さて、今回は崇善寺についてレポートさせていただきます。

私は、1月のはじめに、私の住む太原市の中心部にある崇善寺というお寺に行ってきました。この崇善寺には明代に建てられた建築物と千手観音像があるということを知り、興味がわいたので、見に行ってみるとともに、その歴史についても調べてみることにしました。

崇善寺は、元々は唐代に建造された白馬寺に始まり、後に延壽寺、宗善寺と改名した寺跡に、明時代の洪武14年(1381)の勅令によって建てられたお寺です。これは明代の朱櫚という山西の実質的な統治者が、母を記念するために建造したものであって、祖廟(ズーミャオ:祖先を祭る廟・御霊屋)を兼ねた珍しいお寺で、建造するにあたって、「不惟甲于太原，誠盖晋国第一之佛观」(太原で一番というだけでなく、晋国(当時の太原があった地域の名前。)で一番の仏寺にする)ということを目指された大寺だったそうです。

清代になり、同治3年(1864年)の火災により寺の大部分の建築物が焼失してしまい、明時代のものでも今に残るのは現在の本殿である大悲殿をはじめ、いくつかの建築物だけとなっています。崇善寺の面積は大幅に削減されたものの、その他の建物も含め、その後修復され、現在の崇善寺となったそうです。

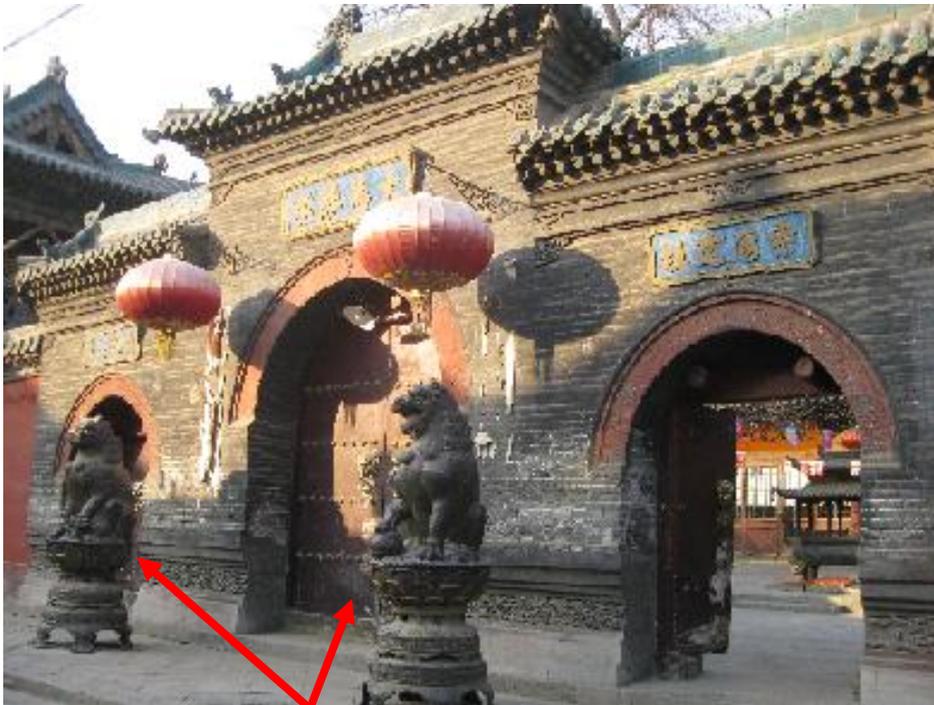
門から入り、正面にあるのが明代に建てられ、今も残る大悲殿です。一見すると、日本の寺院建築と同じように見えますが、屋根の作りや装飾に私の見たことのないものがあり、新鮮でした。また、大悲殿だけでなく、崇善寺全体の装飾に龍が多用されていたことも目を引きました。

大悲殿の中には3体の菩薩像が祀られていました。約8メートルという予想外の大きさとその迫りに圧倒させられました。これらも明代に作られたものらしく、600年以上前の歴史ある寺院や仏像が私の住む太原市内にあることに驚きましたし、改めて太原、山西省が

歴史のある場所であることが感じられました。

崇善寺の歴史については、以下の書籍を参考にしました。

左国保、李彦、张映莹 2005年『山西明代建筑』山西古籍出版社



崇善寺の門です。手前の二匹の獅子も明代に作られたものだそうです。



大悲殿を正面から撮ったものです。



大悲殿内の3体の菩薩像です。天井に届くほど大きく、またその緻密な造りや彩色にも驚きました。